

みずの 水野 ひろのり 広徳 (1875~1945)



軍事評論家。小説家。軍人。和気郡^{ひろまち}広町(現、松山市)出身。愛媛県尋常中学校(現、県立松山東高等学校)を経て、海軍兵学校を卒業し、軍艦「比叡」乗組員となる。日露戦争時は水雷艇長として日本海海戦に臨んだ。軍人としての活動のかたわら、軍事関係の著述活動も行い、明治44(1911)年に出版した『此一戦』は、桜井忠温の『肉弾』とともに戦記文学の双璧とされ、広く読まれた。

しかし、第一次世界大戦中と直後にヨーロッパへ留学した際、現地での惨状を目の当たりにし、人道的平和主義者へと思想的な大転換を遂げる。その後ほどなく退役するが、退役後も筆を休ませることなく太平洋戦争に向かう社会情勢の中で、軍縮・非戦の論陣を張り続けた。

略歴

- | | |
|-----------------|---|
| 明治8(1875)年5月24日 | 和気郡広町に、旧松山藩士・水野光之の次男として生まれる。 |
| 明治31(1898)年11月 | 海軍兵学校を卒業 |
| 明治37(1904)年 | 日露戦争下において、旅順口閉塞作戦に参加 |
| 明治38(1905)年5月 | 日本海海戦に参加 |
| 明治44(1911)年3月 | 日露戦争の経験から『此一戦』を執筆し刊行 |
| 大正2(1913)年 | 日米戦争仮想記「次の一戦」を原稿として書き上げるが、時局柄発表を見合わせる。 |
| 大正3(1914)年 | 『次の一戦』を「一海軍中佐」のペンネームで単行本として出版するが、内容が問題となり、また著者の実名も発覚し、無許可出版のため謹慎を命じられ、同書は絶版となる。 |
| 大正5(1916)年 | 第一次世界大戦戦時下の欧米へ私費で留学 |
| 大正8(1919)年 | 第一次世界大戦直後のヨーロッパへ再度私費で留学 |
| 大正10(1921)年8月 | 退役 |
| 昭和7(1932)年10月 | 日米戦争仮想記『興亡の此一戦』を出版するが、内容が問題となり発売禁止となる。 |
| 昭和12(1937)年2月 | 『日本名将論』を出版するが、以降監視が厳しくなり、著作の刊行が困難になる。 |
| 昭和20(1945)年4月3日 | 越智郡津倉村本庄(現、今治市)に疎開 |
| 10月18日 | 腸閉塞を起こし、今治市の病院において71歳で永眠。墓所は松山市柳井町の蓮福寺
(写真提供：松山市立子規記念博物館) |

〈関連図書〉

- ・水野広徳著作刊行会『反骨の軍人 水野広徳』 経済往来社 1978年
- ・愛媛県史編さん委員会『愛媛県史 文学』 愛媛県 1984年
- ・愛媛子どものための伝記刊行会『愛媛子どものための伝記 第12巻 秋山好古・真之・桜井忠温・水野広徳』 愛媛県教育会 1985年
- ・愛媛県史編さん委員会『愛媛県史 人物』 愛媛県 1989年
- ・『日本平和論大系7 水野広徳・松下芳男・美濃部達吉』 日本図書センター 1993年
- ・前坂俊之『海軍大佐の反戦』 雄山閣出版 1993年
- ・前坂俊之・粟屋健太郎『水野広徳著作集』 雄山閣出版 1995年
- ・河田宏『第一次世界大戦と水野広徳』 三一書房 1996年
- ・大内信也『帝国主義にNOと言った軍人 水野広徳』 雄山閣出版 1997年
- ・曾我部泰三郎『二十世紀の平和論者 海軍大佐水野広徳』 元就出版社 2004年

〈主な収蔵資料〉…(P224, 126)

〈ゆかりのある場所〉…(P310, 187)